斎藤公子保育自然学校　連続講座第７回　赤ちゃんの育て方　　‘18/9/9　於：吉川保育園

大人と赤ちゃんの五感を通した応答と心の育ち

―子どもと保護者の最善の利益を代弁する保育者の役割―

尚絅（しょうけい）学院大学名誉教授　新医協（新日本医師協会）会長　岩倉政城（まさき）

ボクってアタシってダメと思う子がなぜ多い

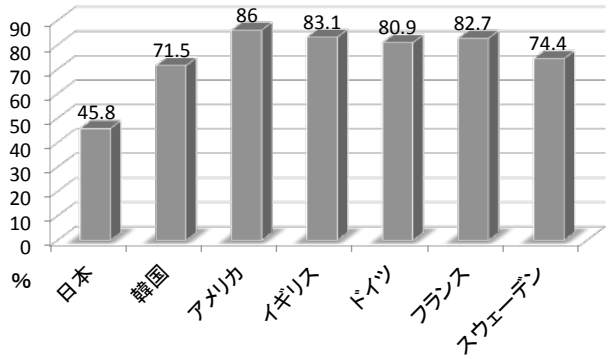
「自分に満足しているか」に世界の子どもの８割は満足。だが日本の子どもだけ半分以下（右図）

東北での私に調査：三歳児の母の 69%が「しつけのためなら子どもを叩いてもよい」、父は 73%

文科省は教師の「体罰」調査：小学生は年間 1559 人が教師からの暴行。日本の子どもへの教育観「いけないことをした子どもは罰する」

「自分は自分であっても大丈夫」と自己肯定感を持てる子はどうしたら育つ？

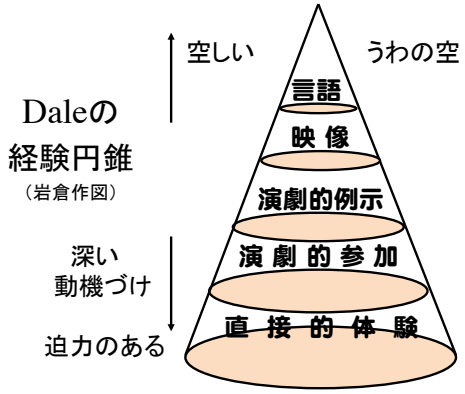
自分自身に満足している割合の国際比較
7カ国13～29歳の若者を対象とした意識調査
（2013内閣府実施より岩倉作図）



ことばと人類史

保育に「ことばがけが大切」という思想が。でも、650 万年の人類史で人と人の交流の原点はことばではない。右図　Dale の学習円錐（百の言葉より一つの抱っこ）。

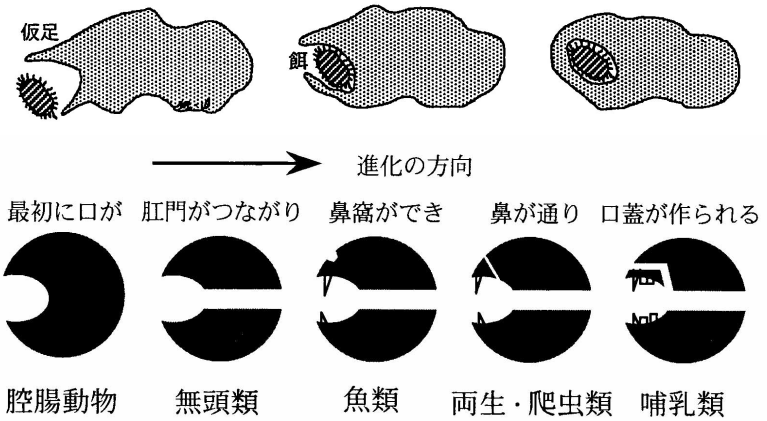
０歳児が経験を積み重ねると６歳ごろには脳神経繊維のネットワークがびっしりとできあがる（体験だけが脳を育てる）



五感が認識と交流の中心

動物の感覚は一番最初の動物アメーバの表面にある触覚。動物は進化して口を作りやがて人間へと辿り着く。その進化を胎児は辿って皮膚（外胚葉）から口や眼などの感覚が集まったいろいろの臓器を作った。脳もまた外胚葉から作られた臓器。

岩倉政城：口を通した子どもの発達、五感からの育ちあい、芽ばえ社、1998.より



口から始まった動物の進化過程（岩倉）

皮膚と皮膚、乳房と口

敏感なあかちゃんの口は生まれて５分でやはり敏感な母の乳房に吸い付く。人が最初に行う他人との共同作業。漲って（みなぎって）痛くなった乳を吸われて母は心地よく、子どもを無条件に受け入れる心を育てる。空腹のつらさを感じていたあかちゃんはおっぱいをもらって心地よくなり、これが 2000 回繰り返される。これに数千回のおむつ替え、数万回の抱っこにおんぶ、入浴、添い寝など五感の体験を通して子どもは人と

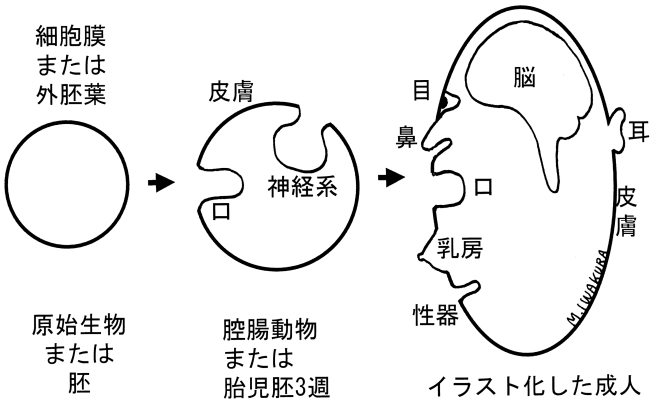
人がかかわり合うことの心地よさを学習。これが「生きてるっていいな」という**基本的信頼**の芽ばえで、この世に自分が存在することを“良し”とする”**自己肯定感**“の核

母（乳房・肌）　――――　子ども（口・肌）
絶対的受容　――　基本的信頼
拒絶　――――――――　不信

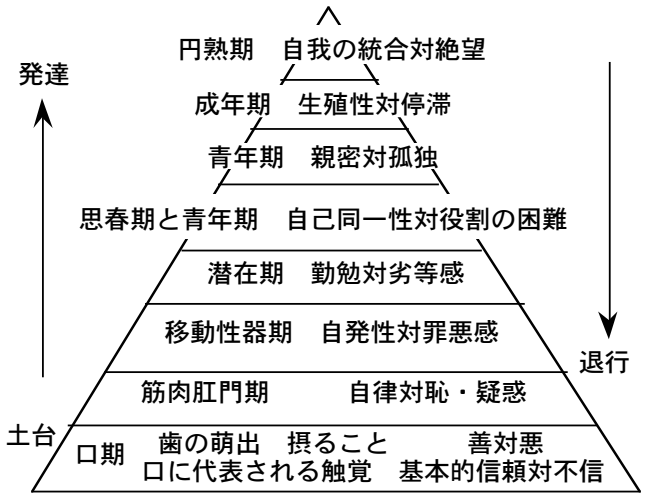
授乳に代表される他者との共同作業を体験して、他者の思いに自分の心を合わせる能力（**情動調律**）＊、交流の意欲、会話への意欲、ことばへの意欲が育ちます。　からだのいろいろな臓器で得られる感覚が人の心の発達と深く関わることを心理学者エリクソンは説き、それを私が三角の図に示した。

＊　**情動調律**とは他者の情動(痛み・怒り・悲しみ・歓び)に自分の情動を合わせ（同じ色に染めて)情緒を共有する能力で、子育て支援者に欠かせない。

皮膚（肌）から派生した口、神経



パンダの子育て
泣くと 1 分間に 100 回の割合で舐めて、おとなしくなると 60 回、眠ると 40 回に現象
エントレインメント（列車に乗せる）子どもの出すサインに親が同調して声や仕草を出力する

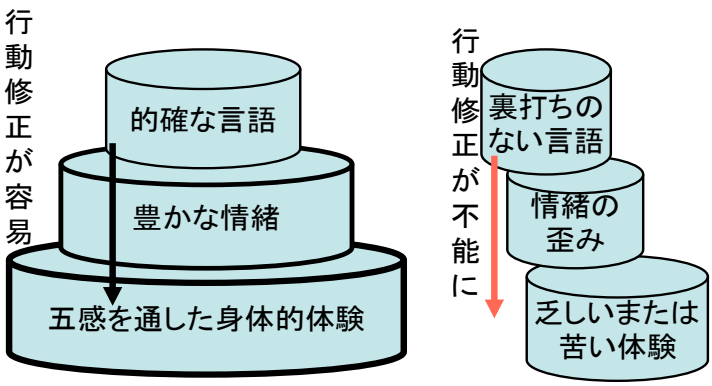


Eriksonの器官発達理論を構造的に描画
（「口から見た子どもの発達」岩倉　芽ばえ社より）

体験無しで「思いやり」は伝わらない
　五感で得られた体験がはじめて情緒を作る。その情緒に裏づけられてはじめてことばは意味を持ってくる。

　優しい子育てを体験できなかった子が乱暴をしたのを止めようと「思いやりを持って人に接しなさい」と説得しても、右図のように「思いやり」を母（養育者）から貰えなかった子にはピンと来ない。

五感を通した豊かな体験があって始めて情緒と言葉がつながり、人と共有できる言葉になる。こうなれば他者からの言葉による働きかけが行動変容につながる。（岩倉）

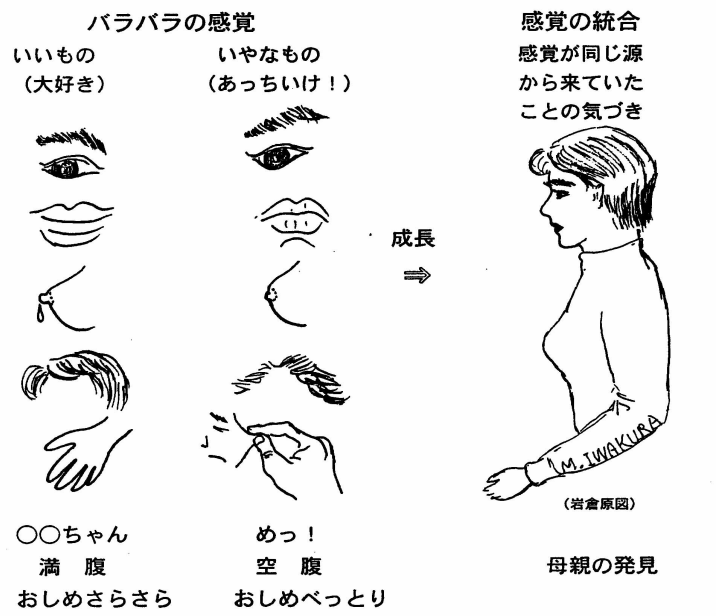


人と人とが意志を通わすには
　ことばによらない交流（触れる、抱く、撫でる、ぬくめる、授乳、添い寝）が出発点
保育実習生の体験　児童養護施設小学 2 年生女児「頬ずりってなに？」
♪命の別名♪　作詞作曲中島みゆき

赤ちゃんは母を未発見

精神分析学や発達心理学の「母」は「中心養育者」。多くは母だが父や祖母、乳児院では保育者が、里子になれば里親が中心養育者で愛着対象となる

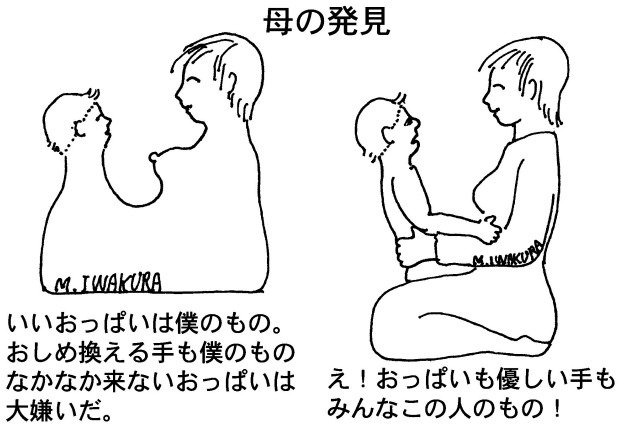
右図：赤ちゃんから見えるのは母のパーツだけ、「いいおっぱい」と「悪いおっぱい」（Good と Bad）に分離し、いいおっぱいを受け入れ悪いおっぱいを拒絶する（妄想・分裂態勢）



対象恒常性（内なる母）獲得を子育て支援の目標に

三人の心理・精神分析家が心の発達の道筋を提案したもの右表にまとめた。

赤ちゃんは母の懐に住む共生期には自分の母を発見していない。空腹の恐怖で泣き、乳房という部品を手に入れ怒りで噛みついたり吸って満腹し恐怖を解消する妄想分裂態勢にいます。膝から離れてハイハイ出来る分化期には母を発見し（**右図**）乳房を提供してくれた母を噛んだり叩いたりした自分を発見し「うつ」の態勢に入ります。歩ける再接近期には外で怖い目に遭うと母のもとに逃げ帰り安心を確保します。3 歳頃には目の前に母がいなくても心に住み着いた優しい母が自分と共にある（**内なる母**）ので、安心して外の社会に冒険に出かけます。



図の一番上は乳幼児期に不全な子育てを受けると思春期に心の症状を出すことを示してあります。

私たちの日常感じるストレスも、**妄想・分裂態勢→うつの態勢→統合**　という道筋を通って処理され成長を遂げます。

私たちが目指すのは幼い子どもの愛着対象になってあげる人（虐待する母がいたら保育者自身が）を育て支え、**対象恒常性**（父・母はいつも僕を見守ってくれているという確信）を子どもの心にはぐくむ。これがあれば二者関係（母と子）から三者関係（友だち）へと社会に参加できるようになります。

Kernbergの境界パーソナリティ論に基づく乳幼児期に対応した思春期症状

統合失調の傾向　　精神病的　　境界例（見捨てられ不安）

発達の段階	Mahler の 発 達 段 階 図					
	共生期	分化期	練習期	再接近期	個体化期	対象恒常性（情緒的な）
		分離・個体化期				
月齢	0〜5カ月	6〜9カ月	9〜15カ月	15〜24カ月	25〜36カ月	36カ月以降

妄想・分裂態勢　　うつの態勢　　統合

Kleinの対象関係論に基づく態勢の推移

精神障害を準備するその始原的生育発達段階の対応図（岩倉2002）

近年の子育て

近世までの子育て　浮世絵の母子像にみられるように胸当てをしていない母が帯を解いて素裸の子どもを胸に抱くのが普通のことだった。

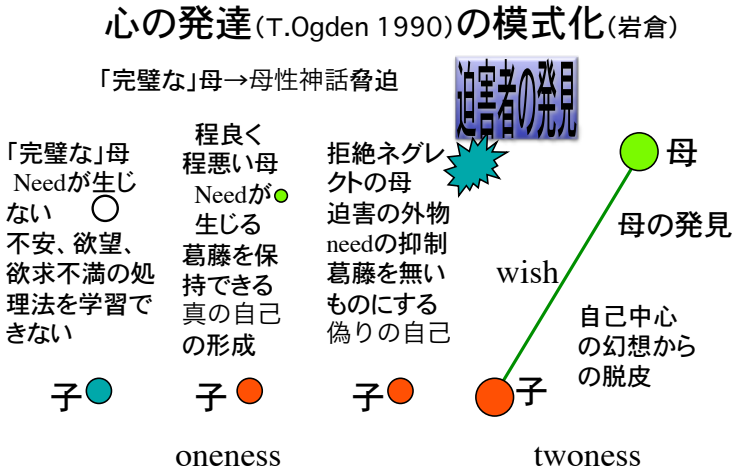
しかし現代は６カ月健診の会場で　おんぶは絶滅　突っこみ哺乳、手持たせ哺乳　タオルを口に泣き寝入り（右写真）

完璧でない親・子育て支援者に

親が完璧だと自制心が育たない（右図）　親が程ほどだと親の都合を考えて自分の欲求をある程度押さえ、他者に配慮する子どもが育つ。

拒絶やネグレクト、情動調律のない子育てを受けると、子どもは愛着対象は得られず代わりに「迫害者」を早々と発見する。これが長じて「対人恐怖」、「不登校」、「引きこもり」などの引き金になる傾向。

保育者も程よく程わるい程度の保育を心がけ、園児の要求にも限界があることを伝えることで、自己中心（妄想分裂態勢）から発達を遂げて他者を配慮できる人間へと成長をうながす。



子育て支援者の虐待親への働きかけ

虐待する親の多くは幼いとき虐待を受けていたか、ＤＶを現に受けている確率が高い。「お母さん、子どもを愛してあげなさい」という母性神話説得は意味をなさない。支援者・保育者は母の表象（トラウマなど）に働きかけて母の生き直し（右図：マコールスコップ）を支援する。

課題をかかえた家族支援で働きかけるべき重点（スターンの図を岩倉改変）

人類の隆盛は集団の子育て

母親同士が集団で哺乳し、自分の子どもをその子の母だけにまかせる子育てをしなかった（共同保育した）人類だけが霊長類の中で栄えた。

今日「子育ての責任は家庭にあり、保育所に預けるのは子育て放棄だ」とのキャンペーンがあるが、人類史が子どもを社会の揺りかごで育てる必要性を教えている。

文献

岩倉政城著　さあ、子どもたちを真ん中に（芽ばえ社）、ボクってすごい・ワタシってすごいと思える子を育てる（芽ばえ社）、かみつく子にはわけがある（大月書店）、口から見た子育て（大月書店）、口を通した子どもの発達（芽ばえ社）、指しゃぶりにはわけがある（大月書店）、五感ではぐくむ子どものこころ（かもがわ出版）